

『菩提心論』を読む

長
澤
弘
隆

『菩提心論』を読む

目次

■まえがき

■『菩提心論』 原文・書き下し・私訳・註記・付記

■序

◆菩提心とは何か

◆三種菩提心

■本論

◆行願段

◆勝義段

◆三摩地段

■あとかき

■まえがき

仏教思想史を通覧すると、大乘の経論の登場とともに、「一切皆空」「諸法の無自性・空」を前提としながら、その一方で「自性清浄心」「仏種」「仏性」「本来成仏」「本覚」「如来蔵」「菩提心」そして「真如」といった妙有説が次第に目立つようになることがわかる。そのなかで特異な存在として目を引くのが『大乘起信論』であり、その注釈の『釈摩訶衍論』であり、この『菩提心論』である。この三論はそろって、仏教思想史のこの重要な問題をテーマとした並々な論書でありながら、なぜか作者を著名な馬鳴や真言付法の第三祖龍猛（あるいはインド大乘中観派の祖師龍樹）に仮託し、実際の作者は不明で、学術の世界では中国成立の偽書とされている。

然るにこの『菩提心論』は、大乘が説く「菩提心」を『大日経』『金剛頂経』をもふまえた密教の立場から論じた「菩提心論」である。なるほど「菩提心」は、『大日経』『住心品』の「三句の法門」に「菩提心を因と為し」と説かれ、『金剛頂経』冒頭の「五相成身観」では「通達菩提心」「修菩提心」が説かれ、密教思想のキーマン金剛薩埵は「菩提心」の象徴であり、「五仏」の阿閼如来は大日如来の本有「菩提心」を仏徳としている。密教の行者（真言行者）にとっても、「菩提心」は必須かつ重要な要件であることがわかる。つまり『菩提心論』は、作者不明の偽書だとしても、大乘と密教に通じた確かな学匠によつて書かれた密教書だと言える。

然らば『菩提心論』は、序において「菩提心」に「行願菩提心」「勝義菩提心」「三摩地菩提心」の三種あることを明かし、本論においてそれら三種の「菩提心」を具体的に説いている。すなわち、要略すれば、「行願菩提心」とは慈悲利他の堅固な意志であり、「勝義菩提心」は大慈悲のもととなる無私の心。「人法二空」「諸法の無自相・空」の大乘の教義であり、「三摩地菩提心」は自心に具有する「菩提心」を月輪観・阿字観などによって明らかに観じること、これら三種の「菩提心」が最初に発起され、そこに堅固に住し常に怠らないことが「即身成仏」の直路であることを説く。

この『菩提心論』を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正No. 1665）を依用した。しかし、ところどころに誤字があるので、『十卷章』（本文編、真言宗智山派宗務庁、宗祖弘法大師ご誕生千二百五十年奉修記念出版、令和五年）所収の『菩提心論』を参照した。古来、原本には各種あるが、私は便宜上「大正新脩大藏經テキストデータベース版」を用いた。

「原文」に続いて「書き下し」を付けた。ほぼ前述の『十卷章』（訓読編）所収の「菩提心論」に依ったが、私が修得した漢文読みの「書き下し」を敢えて用いたところもある。

「書き下し」に続いて「註記」を付けた。専門語や難解な語の解説である。できるかぎり正確を期したが調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。これにはとても時間を費やしたがご参考になれば幸いである。この「註記」は、先学のご労作にしばしば見られる、現代語訳の不明確さに首をかしげた経験に由来するもので、空海密教初学者の手助けになれば幸いである。

「註記」のあとに「私訳」を付けた。私なりの現代語訳であるが、意識による誤訳を避けるため、できるだけ原文に添って直訳した。これも、失礼ながら、先学による原文から離れた意識や、意味のよくわからない現代語訳にたびたび首をかしげた経験に基づいている。

さらに、必要に応じて「付記」を付け私論も述べさせていただいた。

後期高齢による脳力・視力の衰えのせいか、パソコンの文字入力や漢字変換のミスに鈍感になった。誤字・脱字がありま

したらどうかご容赦のほどを。

最後になるが、「私訳」（現代語訳）に際しては、梅尾祥雲博士の名著『現代語の十卷章と解説』を参照し、福田亮成先生の『現代語訳 菩提心論』（弘法大師に聞くシリーズ 別巻）、頼富本宏先生の「菩提心論」（『大乘仏典 中国・日本篇』第八巻「中国密教」、中央公論社）のお世話になった。学恩に感謝の意を表したい。

■「菩提心論」 原文・書き下し・註記・私訳・付記

金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論

亦名瑜伽總持釋門說菩提心觀行修行義

龍猛菩薩造

大興善寺三藏沙門大広智不空 奉詔訳

金剛頂瑜伽の中に阿耨多羅三藐三菩提心を発す論

亦は、瑜伽總持教門に菩提心の觀行を修持することを説く義と名づく

龍猛菩薩の造

大興善寺の三藏沙門大広智不空 詔を奉けて訳す

■序

◆發菩提心とは何か

【原文】

大廣智阿闍梨云。若有上根上智之人。不樂外道三乘法。有大度量。勇銳無惑者。宜修佛乘。當發如是心。我今志求阿耨多羅三藐三菩提不求餘果。誓心決定故。魔宮震動。十方諸佛皆悉證知。常在人天。受勝快樂。所生之處。憶持不忘若願成瑜伽中諸菩薩身者。亦名發菩提心。何者謂此諸尊。皆同大毘盧遮那佛身。如人貪名官者發求名官心修理名官行。若貪財寶者。發求財寶心。作經營財物行。凡人欲求善之與惡。皆先標其心。而後成其志。所以求菩提者。發菩提心。修菩提行。

【書き下し】

大阿闍梨云わく。「若し、上根上智の人^{けつじょう}有つて、外道・二乗の法を樂わず、大度量有つて、勇銳にして惑い無き者は、宜しく佛乘を修すべし。當に是くの如くの心を發すべし。我、今、阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘の果を求めじ、と。心に誓つて決定するが故に、魔宮震動し、十方の諸佛、皆悉く證知す。常に人天^{にんてん}に在つて、勝れた快樂^{けらく}を受け、所生^{しよしやう}の處に、憶持^{おくじ}して忘れず。若し、瑜伽の中の諸菩薩の身を成せんと願わば、亦た發菩提心と名づく。何とならば、次いで爲る諸尊、皆、大毘盧遮那の佛身に同じなり。人の名官^{みやうかん}を貪る者は、名官を求むる心を發し、名官を理むる行を修し、若し、財寶を貪る者は、財寶を求める心を發し、財物を經營する行を作すが如し。凡そ人の善と惡とを爲さんと欲するには、皆、先ず其の心を標して、而して後、其の志を成ず。所以に菩提を求むる者は、菩提心を發し、菩提の行を修す」と。

【註記】

①大廣智阿闍梨・不空三藏。「大廣智」とあることから不空三藏だと解釈すると、この『菩提心論』は不空の弟子の作ということになる。他本では単に「大阿闍梨」となつていて、真言宗の伝統教學では真言付法伝の立場から二説の解釈があり、一つは金剛薩埵とし（すなわち、作者を龍猛菩薩とする）、二つ目は大日如来とする（同じく、作者を龍猛菩薩とする）。二つのうち第一説をとることが多い。ここはそれに従う。

②上根上智・機根（資質）と智慧に最もすぐれている。上根上智・中根中智・下根下智の九段階があり、その最上。

③佛乘・ここは、大乘の意にとる。

④所生の處・出生の場所。

【私訳】

大阿闍梨が云われるに、「もし、資質と智慧に最もすぐれた人で、外道や声聞・縁覚の教法を求めず、大きな度量があつて、（サトリを求めるに）勇敢で惑いがないならば、専念して大乘の教えを修学すべきである」と。まさに、このような心を発起すべきである。「私は今、サトリ（阿耨多羅三藐三菩提）を求めている他の報果を求めることはない」と。心に誓つて意志が堅固であるから、魔王の宮殿は震動し、十方の諸佛はみな悉くこれを知っている。（そのような人は）常に人間や天上界に在って、極上の楽しみを受容し、出生の場所をいつも心に留めて忘れることがない。もし、止観を行じている最中の諸々の菩薩の仏身を成就したいと願うなら、それを発菩提心と言うのである。なぜかならば、法身大日如来に次ぐ諸尊はみな、大日如来の仏身と等同だからである。世の人が、高位の官職を欲しがると人は、高位の官職を求めると人は、高位の官職をおさめる務めをまっとうし、もし、財宝を欲しがると人は、財宝を求める心を起し、財物をやりくりする仕事を行うのと同じである。およそ、世の人が善・悪を行おうとする時はみな、先ずその心を表わし、そのあとで、その志を成就する。であるから、サトリ（菩提）を求める人は、先ず菩提心を發起し、サトリ（菩提）を得る三摩地の止観行を修するのである。

◆三種の菩提心

【原文】

既發如是心已。須知菩提心之行相。其行相者。三門分別。諸佛菩薩。昔在因地。發是心已。勝義。行願。三摩地爲戒。乃至成佛。無時暫忘。唯眞言法中。即身成佛故。是故說三摩地於諸教中。闕而不言。一者行願。二者勝義。三者三摩地。

【書き下し】

既に是くの如くの心を發し已つて、須く菩提心の行相を知るべし。其の行相とは、三門に分別す。諸佛・菩薩、昔、因地に在つて、是の心を發し已り、勝義・行願・三摩地を戒と爲す。乃し成佛に至るまで、時として暫らく忘ること無し。唯だ

眞言法の中にのみ、即身成佛するが故に、是に三摩地の法を説く。諸教の中に於いて、闕して書せず。一には行願、二には勝義、三には三摩地なり。

【註記】

- ①因地…修行の段階。
- ②行願…凡夫・衆生を救済する実践（行）と救済してやまない誓願（願）。すなわち大慈誓願、利他行のこと。
- ③勝義…無自性。空の境地。サトリの境地。
- ④三摩地…サトリの境地を得る止観行。

【私訳】

すでにこのような（菩提）心を発起し終わったら、すべからず菩提心の在り様を知るべきである。その在り様とは、三つの部門に分けられる。諸佛・菩薩は昔、修行の段階に在ってこの心を発し終わり、勝義と行願と三摩地を戒とみなし、成仏に至るまで、一時も忘れることがなかった。ただ、眞言の教法にのみ即身成仏するから、ここに三摩地の教法を説くのである。それは、諸教のなかには欠けていて書かれてもない。一には行願、二には勝義、三には三摩地である。

■本論

◆行願段

【原文】

初行願者。謂修習之人。常懷如是心。我當利益安樂無餘有情界。觀十方含識猶如己身。

【書き下し】

初めに行願とは、謂わく、「修習の人、常に是くの如くの心を懷くべし。我、當に、無餘の有情界を利益し安樂すべし」と。十方の含識を觀ること猶し己身の如し。

【註記】

- ①修習…ここは、止觀行に精勵する、の意にとる。
- ②有情界…生ある者の世界。凡夫・衆生の世界。
- ③含識…心識を有する者。凡夫・衆生。

【私訳】

初めに行願とは、すなわち、（止觀行を）修習する人は、常にこのような心を懷くべきである。「私はまさに、生あるものの世界を余りなく利益し安樂にするべきである。十方の凡夫・衆生を觀ることが己の身を觀るのと同じである」と。

【原文】

所言利益者。謂勸發一切有情。悉令安住無上菩提。終不以二乘之法而令得度眞言行人。知一切有情。皆含如來藏性皆堪安住無上菩提。是故不以二乘之法而令得度。故華嚴經云。無一衆生而不具有如來智慧。但以妄想顛倒執著而不證得。若離妄想。一切智。自然智。無礙智。則得現前。

【書き下し】

言う所の利益とは、謂わく、一切有情を勸發かんぱつして、悉く無上菩提に安住せしむ。終に二乗の法を以つてしても得度せしめず。

今、真言行人、應に知るべし。一切有情は皆、如來藏の性を含じ、皆、無上菩提に安住するに堪任かんにんせり。是の故に、二乗の法を以て得度せしめず。故に、華嚴經に云わく、「二衆生として真如智慧を具足せざるは無し、但だ、妄想・顛倒の執著を以つて證得せず。若し、妄想を離るれば、一切智・自然智・無礙智、則ち現前することを得」と。

【註記】

- ①勸發…勸めて仏道を求めさせる。
- ②得度…サトリを得る。
- ③如來藏の性…如來となる資質（仏性）を本来有していること。
- ④一切智・自然智・無礙智…一切を知る仏智・法爾自然の仏智・障礙がない仏智。

【私訳】

今言つた利益とは、すなわち、一切有情に勸めて仏道を求めさせ、悉く無上のサトリ（菩提）に安住させることであり、終には二乗の（自利の）教法によつてサトリを得させないことである。今、真言行人はまさに知るべきである。あらゆる生あるものはみな、如來藏の本性を有し、無上のサトリ（菩提）の境地に安住するに堪えるものである、と。だから、二乗の（自利の）教法によつてサトリを得させてはならないのである。それ故、『華嚴經』に説くに、「衆生という衆生、真如の智慧を具足していない者はいない。ただ、妄想や顛倒に執著するからサトリを得られないだけである。もし、妄想を離れるなら、

一切法を知る仏智・法爾自然のサトリの仏智・障礙のない仏智が現前する」と。

【原文】

所言安樂者。謂行人。即知一切衆生畢竟成佛故。不敢輕慢。又於大悲門中。尤宜拯救。衆生所求皆與而給付之。乃至身命而不憍惜其命安存。使令悅樂。既親近已。信任師言。因其相親。亦可教導。衆生愚瞽。不可強度。眞言行者。方便引進。

【書き下し】

言う所の安樂とは、謂わく、行人、既に一切衆生の畢竟成佛するを知るが故に、敢えて輕慢きようまんせず。又、大悲門の中に於いて、尤も宜しく拯救じようくすべし。衆生の願に随つて之を給付きふせよ。乃至、身命をも憍惜りんじやくせず。其れをして安存せしめ、悅樂せしめよ。既に親近しんじんし已わらば、師の言を信任せん。其の相親しむに因つて。亦た教導すべし。衆生愚瞽ぐもならば、強いて度すべからず。

眞言行者は、方便引進いんしんすべし。

【註記】

①行人…眞言行者。

②輕慢…見下す。

③拯救…救済する。

④給付…施与する。

⑤悋惜…惜しむ。

⑥親近…身近に親しくなる。

⑦引進…仏道に導き入れる。

【私訳】

今言った安樂とは、すなわち、真言行人は、すでに一切の衆生が究極成仏することを知っているから、敢えて彼らを見下すことなどしない。また、大悲の方便門においては、一生懸命救済・化導すべきである。衆生の願いに従って利益を施与するのである。究極、身命をも惜しまず、彼らを安樂にし、悦ばすべきである。すでに凡夫・衆生が親しく近くにいるようになったら、真言行人の言うことを信任するであろう。そのように相親しむことによって、また教導するべきである。衆生がもし愚蒙ならば、強いて化導しなくてもよい。真言行者は方便によって導き入れるべきである。

◆勝義段

【原文】

一勝義者。觀一切法無自性。云何無自性。

【書き下し】

一に勝義とは、一切法は自性無しと觀ず。云何が自性無しや。

【私訳】

二に勝義とは、一切諸法は無自性であると観じることである。どうして（一切諸法は）自性がないのか。

【原文】

謂凡夫執著名聞利養資生之具。務以安身。恣行三毒五欲。眞言行人誠可厭患誠可棄捨。

【書き下し】

謂わく、凡夫は名聞・利養・資生ししやうの具に執著して、務いとむに安身を以つてし、恣に三毒・五欲を行ず。眞言行人、誠えんげんに厭患すべし。誠に棄捨すべし。

【註記】

- ①名聞：名声。
- ②利養：蓄財。
- ③資生の具：生活用具。資具。
- ④五欲：財欲・性欲・食欲・名誉欲・睡眠欲。
- ⑤厭患：嫌って悩む。

【私訳】

すなわち、凡夫・衆生は名声・蓄財・生活用具に執著し、身の安全に懸命で、勝手気ままに貪り・瞋り・無知蒙昧（三毒）や財欲・性欲・食欲・名誉欲・睡眠欲（五欲）に浸っている。眞言行者は、これらを嫌って悩むべきであり、捨てなければ

ならない。

【原文】

又諸外道等。戀其身命。或助以藥物。得仙宮住壽。或復生天以爲究竟。眞言行人。應觀彼等業力若盡。未離三界煩惱尚存。宿殃未殄。惡念旋起。當後之時。沈淪苦海。難可出離。當知外道之法。亦同幻夢陽焰也。

【書き下し】

又、諸々の外道等は、其の身命を戀^{おも}しみ、或いは助くるに藥物を以つてし、仙宮の住壽を得、或いは復た天に生ずるを究竟と以爲えり。眞言行人、應に彼等を觀ずべし。業力^{ごうりき}若し盡きれぬば、未だ三界を離れず、煩惱尚お存し、宿殃^{しゆくわう}未だ殄^{ほろ}びず、惡念旋起^{せんき}す。彼の時に當つて、苦海に沈淪し、出離すべきこと難し。當に知るべし、外道の法は、亦た幻・夢・陽焰に同じなり。

【註記】

- ①仙宮…不老不死の仙人が住む宮殿。
- ②業力…前世からの善業の残存作用。
- ③宿殃…宿業の災い・災厄。
- ④旋起…巻き起こる。

⑤幻・夢・陽焰…現象そのものに実体がないものの喩え。『大日経』に説かれる「十喩」など。

【私訳】

また、諸々の外道などは、その生命に恋々と執著し、あるいは不老長寿を助けるために藥物を使用し、仙人の宮殿に住んで不老長寿を得、あるいはまた、天上界に生じることを見極だと思っている。眞言行者は、まさに彼らの在り様をよく観察すべきである。もし前世からの善業の残存作用が尽きれば、欲界・色界・無色界の三界から離れられず、煩惱は残り、宿業の災いはまだ消滅せず、悪業の想いが巻き起こるのである。そうになると、苦の海に沈み、そこから出ることもできない。まさに知るべきである、外道の教法は幻・夢・陽焰と同じであると。

【原文】

又二乗之人。聲聞執四諦法。緣覺執十二因緣。知四大五陰畢竟磨滅。深起厭離。破衆生執。勤修本法。剋證其果。趣大涅槃。以爲究竟。眞言行者。當觀二乘之人。雖破人執猶有法執。但靜意識不知其他。又成果位。已灰身滅智。趣其涅槃。如大虛空湛然常寂。有定性者。難可發生。要待劫限等滿。方乃發生。若不定性者。無論劫限。遇緣便迴心向大。從化城起爲已超三界。謂宿信佛故。乃蒙諸佛菩薩而以方便。遂發大心。乃從初十信。下遍歷諸位。經三無數劫難行苦行。然得成佛。既知聲聞緣覺。智慧狹劣。亦不可樂。

【書き下し】

又、二乗の人、聲聞は四諦の法を執し、緣覺は十二因緣を執す。四大・五陰の畢竟磨滅するを知り、深く厭離を起して衆生執を破し、本法を勤修して其の果を剋證す。本涅槃に趣くを究竟と以爲えり。眞言行者は、當に觀ずべし。二乗の人は人執を破すと雖も猶お法執有り。但だ、意識を淨めて其の他を知らず。久々に果位を成じ、灰身滅智を以つて、其の涅槃に趣く

こと、大虚空の如く湛然常寂なり。じようしよう定性有る者は、ほっしよう發生すべきこと難し。かなら要ず劫限等の満を待つて、方に乃ち發生す。

若し不定性の者ならば、劫限を論ずること無し。縁に遇えば便ち迴心えしん向大す。化城けじよう從り起つて三界を超えたりと以爲えり。

謂わく、宿むかし、佛を信ぜしが故に、乃ち諸佛・菩薩の加持力を蒙つて、方便を以つて遂に大心を發す。いま乃し、初めは十信從り下は遍く諸位を歴て、三無數劫を経、難行苦行して、然して成佛を得。既に知りぬ、聲聞・緣覺は智慧狹劣なり。亦た樂うべからず。

【註記】

①衆生執…人我と法我。

②本法…声聞にとつての「四諦」、緣覺にとつての「十二因縁」。

③剋證…よく覺る。

④本涅槃…身心のはたらきがすべて消滅した無余涅槃。

⑤人執…人我。我執。

⑥法執…法我。事物・事象の属性に対する執著。

⑦定性…声聞や緣覺になることが決っていること。

⑧發生…ここは、大乘に向う心を發起する意にとる。

⑨化城…現象に実体のないこと。幻・夢・陽焰など。

【私訳】

また、声聞・縁覚の二乗の人は、声聞は「四諦」の教法に執著し、縁覚は「十二因縁」に執著している。地・水・火・風の「四大」も、色・受・想・行・識の「五陰」も、最後はすり減ってなくなることを知り、その執著から離れる心を深く起し、人我と法我という衆生の執著を断ち、その基本の教法である「四諦」「十二因縁」を懸命に修習してその報果（有余涅槃）を証得する。本来の涅槃（無余涅槃）に趣くことを究極だと思っている。真言行者は、まさに観じるべきである。二乗の人は人我の執著を断つが、なお法我の執著がある。ただ、第六の意識を無執著で浄めて他の第七（末那）・第八（アーラヤ）の識を知らない。長々と時間をかけてサトリの果位を成就し、身を灰になるまで焼き尽くし智心も滅した無余涅槃に趣くのは、広大な虚空のように静かで動かず常に寂然としている。声聞や縁覚になることが決っている人は、大乘に向う心を発起することは難しい。かならず、永遠に近い長い時間の時限が満つるのを待つて、大乘に向う心が発起するのであり、もし声聞や縁覚になることが決っていない人（菩薩）であるなら、永遠に近い長い時間の時限を論ずる必要はなく、機縁に遇えばすぐ心を廻らし大乘に心が向かう。（声聞・縁覚は）実体のないサトリの境地を出て欲界・色界・無色界の三界を超えたと思っている。すなわち、昔仏を信じたおかげで、諸佛・諸菩薩の加持力をいただくことができ、大悲方便によって大乘に向う心を発起するのである。初めは「十信」からはじまり以後は諸々の修行位を歴て、三阿僧祇劫を経て、難行苦行して、そうしてやっと成仏を得るのである。すでにわかったように、声聞・縁覚は智慧が狭く劣っている。これを希ってはならない。

【原文】

又有衆生。發大乘心行菩薩行。於諸法門。無不遍修。復經三阿僧祇劫修六度萬行。皆悉具足。然證佛果。久遠而成。斯由所習法散致有次第。今眞言行人。如前觀已。復發利益安樂無餘衆生界一切衆生心。以大悲決定。永超外道三乘境界。復修瑜伽勝上法。能從凡入佛位者。亦超十地菩薩境界。

【書き下し】

又、衆生有つて、大乘の心を發して菩薩行を行ず。諸々の法門に於いて遍く修せざること無し。復た、三阿僧祇劫を経て、六度萬行を修し、皆悉く具足して、然して佛果を證す。久遠にして成ずるは、斯れ所習の法教の致^{むね}、次第有るに由つてなり。今、眞言行人、前の如く觀じ已るべし。復た、無餘の衆生界の一切衆生を利益し安樂する心を發する者は、大悲決定するを以つて、永く外道・二乗の境界を超ゆ。復た、瑜伽勝上の法を修する人は、能く凡從り佛位に入る者なり。亦た十地の菩薩の境界を超ゆ。

【註記】

①大乘の心…大悲利他の心。菩薩の心位。

②六度萬行…六波羅蜜行。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若（智慧）。

③致…趣旨・おもむき。

④十地…菩薩の修行位の最終段階。法雲地・善想地・不動地・遠行地・現前地・難勝地・焰光地・發光地・離垢地・歡喜地。

【私訳】

また、衆生のなかに人あつて、大乘の大悲利他の心を發起して菩薩行を行じたとする。その人はいくつもの修行位をすべて修習し、また、三阿僧祇劫という途方もなく長い時間、六波羅蜜行を行じ、それらを悉く成満して仏果を成就するのである。途方もなく長い時間かけて成就するのは、修習する法教の趣旨に順序があるからである。今、眞言行者は、前のように觀じておくべきである。また、衆生界の一切の衆生を余すところなく利益し安樂にする心を發起する者は、大悲悲を心に決めているが故に、永く外道・二乗の境地を超えられる。また、最上の瑜伽觀法を修習する人は、よく凡夫・衆生の境地から仏の

境地に入ることができ、また「十地」の菩薩の境地も超えることができる。

【原文】

又深知一切法無自性。云何無自性。前已旨陳。夫迷途之法。從妄想生。乃至展轉。成無量無邊煩惱。輪迴六趣者。若覺悟已。妄想止除。種種法滅。故無自性。復次諸佛慈悲。從眞起用。救攝衆生。應病與藥。施諸法門。隨其煩惱對治迷津遇^い棧達於彼岸。法亦應捨。無自性故。如大毘盧遮那成佛經云。諸法無相。謂虛空相。作是觀已。名勝義菩提心。

【書き下し】

又、深く一切法は自性無しと知る。云何が自性無しや。前に已に旨陳す^{しちん}（異本では、「前には相説を以つてし、今は旨陳を以つてす」）。夫れ、迷途の法は、妄想従り生ず。乃至、展轉して無量無邊の煩惱を成して六趣に輪迴す。若し、覺悟し已んぬれば、妄想は止除して種種の法滅す。故に自性無し。復た次に、諸佛の慈悲は、眞従り用を起して、衆生を救攝す。病に應じて藥を與え、諸々の法門を施し、其の煩惱に隨つて迷津^{めいしん}を對治す。棧^{いかだ}に遇いて彼岸に達すれば、法は、已に捨つべし。自性無きが故に。大毘盧遮那成佛經に云うが如し、「諸法は無相なり。謂わく、虚空の相なり」と。是の觀を作し已るを、勝義菩提心と名づく。

【註記】

①旨陳：本旨を陳べる。

②迷途の法：迷妄の道をさまよう凡夫・衆生の認識対象の属性。

③六趣・六道。

④眞・真実そのもの・真如。

⑤迷津・迷いの岸辺。

⑥對治・断つ・除く。

⑦椓・いかだ。般若波羅蜜。

【私訳】

また、(前述の人は)深く一切諸法は自性がないことを知る。どうして自性がないのか。以前にすでに本旨を陳べた(異本では、「以前に在り様(相)を説き、今は本旨を陳べることとする」)。そもそも、迷妄の道をさまよう凡夫・衆生の認識対象の属性は妄想から生じ、それが変転して限らない数量の煩惱を生じ、地獄・餓鬼などの「六道」に輪廻する。もし、サトリを得ることができれば、妄想は止んでなくなり種々の認識対象の属性は消滅する。だから、事物・事象の属性に実体(自性)はもとともないのである。また次に、諸仏の大慈悲は、真実そのもの(真如)からそのはたらきが起るもので、凡夫・衆生を救済し摂受するのである。病に応じて薬を与えるように、諸々の法門を施して、それぞれの煩惱に應じて、迷いの岸辺を除くのである。般若波羅蜜の筏に遭遇してサトリの岸辺に到達すれば、事物・事象の属性(法)は、すでに捨てられている。法には実体(自性)がないからである。『大毘盧遮那成佛神變加持經』(『大日經』)「住心品」に説かれているように、「事物・事象の属性(諸法)はそもそも実体がないから、本来姿・かたちがない(無相)。すなわち、虚空と同じ姿・かたちである」。この觀を尽くすことを勝義菩提心と言うのである。

【原文】

當知一切法空。已悟法本無生。心體自如。不見身心。住於寂滅平等究竟眞實之智。令無退失。妄心若起。知而勿隨。妄若息

時。心源空寂。萬德斯具。妙用無窮。所以十方諸佛。以勝義行願爲戒。但具此心者。能轉法輪。自他俱利。

【書き下し】

當に知るべし、一切法は空なり。已に法の本無生を悟りぬれば、心體自如にして身心を見ず。寂滅平等・究竟眞實の智に住して退失なからしむ。妄心の若し起らば、知って隨うこと勿れ。妄の若し息む時は心源空寂たり。萬德斯に具し妙用無窮なり。所以に十方の諸佛、勝義・行願を以つて戒と爲す。但し、此の心を具す者は能く法輪を轉じて自他俱に利す。

【註記】

①心體自如…ころそのものが法爾自然。

②妙用…すぐれたはたらき。

【私訳】

當に知るべきである。一切の諸法は空である。すでに事物・事象の属性が本来は不生不滅（無生）であることを悟つたら、心そのものが法爾自然であり。身体も心体もその実体は見えない。静寂で平等な、究極の眞實の智慧に住してそこから退くことはない。妄心がもし起つたら、それを知つても隨うことがないように。妄心がもし止んだ時は心の源底は空であり寂靜である。あらゆる徳を具し、すぐれた徳のはたらきは窮まりがない。だから、十方の諸仏は、勝義と行願を以つて戒とするのである。また、この心を持つ者は、よく法輪を轉じて（説法をして）自他ともに利益するのである。

【原文】

如華嚴經云

悲光慧爲主	方便共相應	信解清淨心	如來無量力
無礙智現前	自悟不由他	具足同如來	發此最勝心
佛子始發生	如是妙寶心	則超凡夫位	入佛所行處
生在如來家	種族無瑕玷	與佛共平等	決成無上覺
纔生如是心	即得入初地	心樂不可動	譬如大山王

【書き下し】

『華嚴經』に云うが如きは、

「悲を先とし慧を主と爲して 方便共に相應じ 信解清淨の心 如來無量の力あり
無礙の智現前し 自ら悟り他に由らず 具足して如來に同じく 此の最勝の心を發す
佛子始めて 是くの如き妙寶の心を發生すれば 則ち凡夫の位を超え 佛の所行處に入る

如來の家に生在し 種族に瑕玷けてん無く 佛と共に平等なり 決さだめて無上覺を成ずべし

纔かに是くの如くの心を生じれば 即ち初地しゅちに入ることを得 心樂動くべからざること 譬えば大山王の如し」と。

【註記】

①種族…如來の家に生まれること。

②瑕玷…傷・欠点。

③初地…菩薩の五十二位のうち、最初の段階の「十信」の「信心」。

【私訳】

『華嚴經』「十地品」に説くに、

「大慈悲を優先し、智慧を主たるものとし、智慧と方便が共に応じ合い、教法を信じ理解する清らかな心位には、如來の量りしれない力がある。妨げるものがない無礙の智慧が現前し、自ら悟つて他によらず、如來と同じサトリの境地を得て、この最もすぐれた心を發起する。私たち仏弟子がはじめて、このような至宝の心を發起すれば、凡夫・衆生の心位を超えて、仏の行い（大悲利他）の住処に入る。仏（如來）の家に生れ育ち、生れた家柄に欠点がなく、仏と共に平等である、かならず無上のサトリを成就するに相違ない。わずかでもこのような心を發起すれば、初地に入ることを得、心が何か求めて動くことがない、譬えば大きな山の王のようである」と。

【原文】

又准華嚴經云。從初地乃至十地。於地地中。皆以大悲爲主。

【書き下し】

又、華嚴經に云うに准ずれば、「初地従り乃至十地に至るまで、地地中に於いて皆大悲を以つて主と爲す」と。

【私訳】

また、『華嚴經』に説くところによれば、「初地（「十信」の「信心」）から「十地」に至るまで、それぞれの修行位において、みな大慈悲を主とするのだ」と。

【原文】

如無量壽觀經云。佛心者。大慈悲是。

【書き下し】

無量壽觀經に云うが如し、「佛心者。大慈悲是」と。

【註記】

①無量壽觀經：『仏説観無量寿仏経』（南宋、冨良耶舎訳、通称『観無量寿経』、略称『観経』）。『仏説無量寿経』（東晋の仏陀跋陀羅・宝雲訳、略称『大経』）と『仏説弥陀経』（鳩摩羅什訳、略称『小経』）とともに、浄土系宗派が根本經典とする浄土三部経。

【私訳】

『仏説観無量寿仏経』に説かれている通り、「佛心とは、大慈悲是れなり」と。

【原文】

又涅槃經云。南無純陀。身雖人身。心同佛心。

【書き下し】

又、涅槃經に云わく。「南無純陀。身は人身なりと雖も、心は佛心の同じ」と。

【註記】

①純陀…入滅前の釈尊に最後の供養（施食）をした仏弟子。その最後の供養について、ウィキペディア「純陀」を借りると、

純陀は、幼い頃に両親を亡くし、小さな鍛冶屋を営む青年であった。しかし敬虔な仏教徒であった彼は、出家していないにもかかわらず熱心に研鑽を重ね、街の人々にその素晴らしさを説き証して、積極的な布教に努めていたと言われている。ある日、純陀は、自分の所有する果樹園に高齢の釈迦とその弟子一行が休まれていることを知り、偉大な尊者の存在に驚喜して、一行を自分の家に招く。釈迦は、純陀のもてなしを喜ぶと共に、彼に教典を説く。純陀は一行を手厚くもてなし、翌日の朝食を準備する意向を伝えると、釈迦はこれを快諾し、翌朝、弟子達と共に純陀宅を訪れ招き与る。

純陀が差し出した料理はスーカラ・マッダヴァといい、スーカラとは「野豚」、マッダヴァとは「柔らかい」と訳される。これがどんな料理だったのかについては諸説入り乱れており、キノコを使った料理とも、豚肉を使った料理とも言われ、判然としない。出家僧であり、しかも体力を消耗した高齢の釈迦に対して肉料理を差し出すことは疑問であり、トリュフのように豚がキノコを好む性格を利用して採取するキノコもあるので、北伝仏教及び漢訳經典では、豚が好む種のキノコを使った料理というのが有力と言われている。しかし、釈迦在世の初期仏教では、提婆達多の分派をめぐる問題から知られるように、釈迦は肉食禁止そのものは賛成しなかった。したがって、南伝仏教徒においては、「柔らかい豚肉」とすることに抵抗を感じなかった。なお純陀は、スーカラ・マッダヴァ以外にも、さまざまな料理を用意したが、釈迦は純陀に「自分はその料理だけでいい。他のごちそうは弟子たちに振る舞いなさい」と指示している。

ある日、釈迦が街を通過すると聞きつけた彼は、街の在家信徒と人と共に釈迦の元へ駆けつけた。しかし、釈迦は、既に八十歳を超える高齢の上体力を消耗し切っていた。この時期、釈迦の功德は広く世に広まっており、世の高僧や王までもが街に美麗を尽くした供養を持参して捧げようとした。しかし、釈迦はこれを謝辞し、その中から純陀が持参した質素なキノコ料理を選んでこれを受けた。釈迦が、高僧や貴族らの持参した多くの供養を退け、純陀のキノコ料理だけを選んだ理由については、純陀が、在家で貧民の身でありながら、自分の説き証した教義を、街の高僧よりも純粋に履行し、道を求めるに身分は関係ないという理想の求道姿勢を見たからと見られている。

だが、純陀の料理を食べた釈迦は、その直後激しい腹痛を訴えるが（食中毒の症状だと思われる）、平静を装っていた。純陀は、事態を理解して、釈迦の一行に加わり旅に出る（一説には同名の別弟子を指すとも言われるが判然としない）。しかし、高齢に激しい食中毒様の症状を現した釈迦は、遂にカクタール川のほとりで倒れ伏し、純陀に床を作るよう指示し、そこにしばし休むことになる。釈迦は、ここで内弟子のアーナンダらに対し次のように告げた。

「いいかアーナンダ、きつと誰かが言い出すだろう。〈純陀が毒料理を食べさせたせいだ。純陀は徳のない悪党だ〉と。しかし、それは間違いである。私は、純陀の料理を最後の供養として逝くのであるから、第一にこの生涯のさとりを大成させ、第二に大般涅槃に至らせてくれたのである。この供養は、私が受けた供養の中でもスジャータ（成道の際に最初に乳粥の供養を捧げた村娘）のものと並び、我が人生の供養の中で最も重要なものである。大いなる威徳がある供養だ。純陀は大いなる威徳を積み、偉大な尊者となるべき偉業を成し遂げたのだ。純陀を恨む者が現れたなら、よく諭すのです」。そして、総括として、「布施を実行する者こそ功德あり。貪り・怒り・痴を超越し、人心を超える」と宣言した。

②身は人身…①によれば、人身とは在家信者の意にとれる。

【私訳】

また、『涅槃經』に説くに、「純陀に帰依します。その身は在家の身ではあるが、心は菩薩の心（仏心）と同じである」と。

【原文】

又云

憐愍世間大醫王	身及智慧俱寂靜	無我法中有眞我	是故敬禮無上尊
發心畢竟二無別	如是二心先心難	自未得度先度他	是故我禮初發心
發心已爲人天師	勝出聲聞及緣覺	如是發心過三界	是故得名最無上

【書き下し】

又、云わく、

「世間を憐愍する大醫王の、身及び智慧は俱に寂靜なり。

無我の法の中に眞我有り、是の故に無上尊を敬禮す。

發心・畢竟の二に別無く、是くの如くの二心は先心難しとす。

自ら未だ度を得ずして先に他を度す、是の故に、我、初發心を禮す。

初發已に人天の師と爲り、聲聞及び緣覺に勝出せり。

是くの如くの發心は三界を過ぎ、是の故に最無上と名づけることを得」と

【註記】

①大醫王…仏。

②無我・無自性・空・

③眞我・眞實の我。眞實の實在。

④先心・先立つ心・最初の心。

⑤初發心・はじめて菩提心を發起すること。

【私訳】

また、『涅槃經』に説くに、

「世間の凡夫・衆生を哀れむ仏の、身体も智慧も寂靜である。

無自性・空の教法のなかに眞實の實在がある、だからこの上ない仏尊として敬われ拜まれるのである。

はじめて菩提心を発することとサトリを得ることの二つに区別ないが、この二つの心は先立つ心の方が難しい。

自分は敢えてサトリを得ず、先に他者にサトリを得させることから、私は初發心に敬礼するのである。

初發心の時すでに人間界・天上界の師となり、声聞・縁覺に勝っている。

このような發心は欲界・色界・無色界の「三界」を超え、その故にこの上なき最上の心と言われる」と。

【原文】

如大毘盧遮那經云。菩提爲因。大悲爲根。方便爲究竟。

【書き下し】

大毘盧遮那經に云うが如し、「菩提爲因。大悲爲根。方便爲究竟」と。

【註記】

①菩提・菩提心。

【私訳】

『大毘盧遮那成仏神變加持經』（大日經）「住心品」に説くに、「菩提心を因と爲し、大悲を根と爲し、方便を究竟と爲す」と。

◆三摩地段

【原文】

第三言三摩地者。眞言行人如是觀已。云何能證無上菩提。當知法爾應住普賢大菩提心。一切衆生本有薩埵。爲貪瞋癡煩惱之所縛故。諸佛大悲。以善巧智。説此甚深祕密瑜伽。令修行者。於内心中。觀白月輪。由作此觀。照見本心。湛然清淨。猶如滿月光遍虛空無所分別。亦名覺了。亦名淨法界。亦名實相般若波羅蜜海。能含種種無量珍寶三摩地猶如滿月潔白分明。何者。爲一切有情。悉含普賢之心。我見自心。形如月輪。何故以月輪爲喻。謂滿月圓明體。則與菩提心相類。凡月輪有二十八分。喻*瑜伽中金剛薩埵至金剛拳有十六大菩薩者。

【書き下し】

第三に、三摩地と言つば、眞言行人、是くの如く觀じ已つて、云何が能く無上菩提を證するや。當に知るべし、法爾に普賢大菩提心に住すべし。一切の衆生は本有の薩埵なるも、貪・瞋・癡の煩惱の縛する所と爲るが故に、諸佛の大悲、善巧智を以つて、此の甚深祕密の瑜伽を説き、修行者をして内心中に於いて、日月輪を觀ぜしむ。此の觀を作すに由つて、本心を照見するに、湛然として清淨なること、猶し滿月の光の虚空に遍じて。分別する所無きが如し。亦是無覺了と名づけ、亦是淨法界と名づけ、亦是實相般若波羅蜜海と名づく。能く種種無量の珍寶三摩地を含むこと、猶し滿月の潔白分明なるが如し。

何んとならば、爲わく、一切の有情は悉く普賢の心を含ぜり。我、自心を見るに、形、月輪の如し。何が故に月輪を以て喩と爲す。爲わく、満月圓明の體は、則ち菩提心と相類す。凡そ月輪に一十六分有り。瑜伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで、十六大菩薩者有るに喩う。

【註記】

①普賢大菩提心…普賢菩薩のような堅固な菩提心。

②本有の薩埵…本来は菩薩。

③善巧智…方便の智慧。

④本心…本有の菩提心。

⑤無覺了…覺った自覺もない。

⑥實相般若波羅蜜海…一切諸法の眞実相を覺る般若波羅蜜の海。

⑦十六大菩薩…金剛界曼荼羅の中央（成身会）の四仏（阿閼・宝生・阿弥陀・不空成就）を供養する菩薩。東方の金剛薩埵・

金剛王・金剛喜・金剛愛、南方の金剛幢・金剛宝・金剛光・金剛笑、西方の金剛語・金剛因・金剛法・金剛利、北方の金

剛牙・金剛業・金剛護・金剛拳。

【私訳】

第三に、三摩地を説くに、眞言行者は、以上のように觀じ終わって、どのようにすれば、この上ないサトリを成就できるのだろうか。まさに（以下のように）知るべきである。法爾自然に普賢菩薩のような堅固な菩提心に住するべきである。一切の凡夫・衆生は本来は菩薩（薩埵）であるが、貪・瞋・癡の「三毒」に縛られているから、諸仏は大悲方便の智慧によつてこの深い秘密の止觀行（三摩地）を説き、修行者をして内心に日・月輪を觀じさせるのである。この觀法を行じること、

本有の菩提心を明らかに見ると、静寂にして清らかで、満月の光が虚空に遍く満ちて認識の対象も見えない。覚ったという自覚もなく、清らかな法界であり、一切諸法の真実相を覚る般若波羅蜜の海である。種種の量り知れない珍宝のような三摩地を包含し、満月が白くくつきりと輝き夜空に明了なのとおなじである。どうしてそうなるかと言えば、一切の生ある者は悉く堅固な菩提心を具有しているからである。私が自分の心を見ると、その形は月輪（菩提心の象徴）のようである。どうして月輪を喩えとするとすかと言え、すなわち、満月の円くくつきりと明るい姿は、菩提心と相似だからである。およそその月輪に十六の区分がある。金剛界曼荼羅の観法のなかで観じる金剛薩埵から金剛拳に至るまでの十六大菩薩に喩えているのである。

【原文】

於三十七尊中。五方佛位。各表一智。東方阿閼佛。因成大圓鏡智。亦名金剛智也。南方寶生佛。由成平等性智。亦名灌頂智也。西方阿彌陀佛。由成妙觀察智。亦名蓮華智。亦名轉法輪智也。北方不空成就佛。由成所作智。亦名羯磨智也。中方毘盧遮那佛。由成法界智爲本。已上四佛智出生四波羅蜜菩薩焉。四菩薩。即金寶法業也。三世一切諸聖賢。生成養育之母。於是印成法界體性中。流出四佛也。四方如來。各攝四菩薩。東方阿閼佛攝四菩薩。金剛薩埵。金剛王。金剛愛。善哉。爲四菩薩也。南方寶生佛攝四菩薩。金剛寶。金剛光。金剛幢。金剛笑。爲四菩薩也。西方阿彌陀佛攝四菩薩。金剛法。金剛利。金剛因。金剛語。爲四菩薩也。北方不空成就佛攝四菩薩。金剛業。金剛護。金剛牙。金剛拳。爲四菩薩也。四方佛各四菩薩。爲十六大菩薩也。於三十七尊中。除五佛四波羅蜜及後四攝八供養。但取十六大菩薩爲四方佛所攝也。又摩訶般若經中。內空至無性自性空。亦有十六義。一切有情於心質中。有一分淨性。衆行皆備。其體極微妙。皎然明白。乃至輪迴六趣。變不變易。如月十六分之一。凡月其一分明相。若當合宿之際。但爲日光。奪其明性。所以不現。後起月初。日日漸加。至十五日圓滿無礙。所以觀行者。初以阿字發起本心中分明。即漸令潔白分明。證無生智。

【書き下し】

三十七尊の中に於いて、五方の佛位、各々一智を表す。東方の阿閼佛は、大圓鏡智を成ずるに因つて、亦た金剛智と名づく。

南方の寶生佛は、平等性智を成ずるに由つて、亦た灌頂智と名づく。西方の阿彌陀佛は、みょうかんざつち妙觀察智を成ずるに由つて、亦た

蓮華智と名づく。亦た轉法輪智と名づく。北方の不空成就佛は、じょうしよさち成所作智を成ずるに由つて、亦た羯磨智と名づく。中方の

毘盧遮那佛は、法界智を成ずるに由つて本と爲す。已上の四佛の智より四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩は即ち金・寶・法・業なり。三世の一切の諸々の聖賢しやうげんの生成しやうじやう養育の母なり。是に於いて、印成いんじやうせる法界體性の中より、四佛を流出す。四方の如來に各々四菩薩を攝す。

東方の阿閼佛に四菩薩を攝す。金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛善哉、を四菩薩と爲す。

南方の寶生佛に四菩薩を攝す。金剛寶・金剛光・金剛幢・こんじやうとう金剛笑、を四菩薩と爲す。

西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す。金剛法・金剛利・金剛因・金剛語、を四菩薩と爲す。

北方の不空成就佛に四菩薩を攝す。金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳、を四菩薩と爲す。

四方の佛の各々の四菩薩を十六大菩薩と爲す。三十七尊の中に於いて、五佛・四波羅蜜、及び後の四攝・八供養を除いて、但だ十六大菩薩の四方佛の所攝爲るを取る。又、摩訶般若經の中に、内空より無性自性空に至るまで、亦た十六の義有り。

一切の有情、心質しんぜつの中に於いて、一分の淨性有り。衆行しゆぎやう、皆備われり。其の體、極微妙ごくみまうにして、皎然明白きやうねんみひやくなり。乃至、

六趣に輪廻するも、亦た變易せず。月の十六分の一の如し。凡そ月の其の一分の明相、若し含宿の際に當んぬれば、但し日光の爲に其の明性を奪わる。所以に現せず。後起つ月の初めより、日に漸く加して、十五日に至つて圓滿無礙なり。所以に觀行者は、初めに阿字を以つて本心の中に分の明を發起し、只漸く潔白分明ならしめて、無生智を證す。

【註記】

①三十七尊…金剛界曼荼羅の三十七尊。

②五方の佛位…五仏。大日如来（中央）・阿閼如来（東方）・宝生如来（南方）・阿弥陀如来（西方）・不空成就如来（北方）。

③各々一智…五智。法界体性智（大日）・大円鏡智（阿閼）・平等性智（宝生）・妙觀察智（阿弥陀）・成所作智（不空成就）。

④聖賢…聖者・賢者。

⑤印成…究極の境地、の意にとる。

⑥四波羅蜜…四波羅蜜菩薩。金剛界曼荼羅中央の大日如来に近侍する妃菩薩。

金剛波羅蜜菩薩は、阿閼如来が大日如来を供養するために出生した妃菩薩。

宝波羅蜜菩薩は、宝生如来が大日如来を供養するために出生した妃菩薩。

法波羅蜜菩薩は、阿弥陀如来が大日如来を供養するために出生した妃菩薩。

業波羅蜜菩薩は、不空成就如来が大日如来を供養するために出生した妃菩薩。

⑦四攝…四摂菩薩・四門護菩薩。凡夫・衆生を曼荼羅に導き入れる菩薩。

金剛鈎菩薩は、堅固な菩提心で凡夫・衆生を惡趣から引き出し、曼荼羅に導き入れる菩薩。

金剛策菩薩は、大慈悲を以つて凡夫・衆生を等しく曼荼羅に導き入れる菩薩。

金剛鎖菩薩は、凡夫・衆生に菩提心を發起させ、仏道に固く留めて曼荼羅に導き入れる菩薩。

金剛鈴菩薩は、鈴の音を響かせて凡夫・衆生を曼荼羅に導き入れる菩薩。

⑧八供養…八供養菩薩。大日如来が四仏を供養するために出生した内供養の四妃菩薩と、四仏が大日如来を供養するために出生した四妃菩薩。

〈内供養菩薩〉

金剛嬉菩薩は、遊戯・愛楽の歡びを以って阿閼如来を供養する妃菩薩。

金剛覺菩薩は、宝覺を以って宝生如来を供養する妃菩薩。

金剛歌菩薩は、歌詠・偈頌を以って阿弥陀如来を供養する妃菩薩。

金剛舞菩薩は、舞踊を以って不空成就如来を供養する妃菩薩。

〈外供養菩薩〉

金剛香菩薩は、焼香を以って大日如来を供養する妃菩薩。

金剛華菩薩は、華を以って大日如来を供養する妃菩薩。

金剛燈菩薩は、燈明を以って大日如来を供養する妃菩薩。

金剛塗菩薩は、塗香を以って大日如来を供養する妃菩薩。

⑨摩訶般若經・内空より無性自性空…『大般若經』の第二会『三万五千頌般若經』や第四会『八千頌般若經』、また『中辺分別論』などに説かれる十六空。「内空」「外空」「内外空」「大空」「相空」「空空」「本性空」「畢竟空」「無際空」「一切法空」

「勝義空」「無性空」「無性無自性空」「有為空」「無為空」「無散空」。

⑩心質…心の本質。

⑪皎然…明るい。

⑫合宿の際…太陽と月が重なった時。

⑬無性智…無自性・空の智慧。

【私訳】

金剛界曼荼羅の三十七尊のなかで、中央・東方・南方・西方・北方の五方の仏は、各々一つの智慧を表象している。東方の阿閼仏は、堅固な大円鏡智を成就するので、金剛智とも言う。南方の宝生仏は、平等性智を成就するので、灌頂智とも言う。西方の阿弥陀仏は、妙觀察智を成就するので、蓮華智とも言い、転轉法輪智とも言う。北方の不空成就仏は、成所作智を成就するので、羯磨智とも言う。中方の毘盧遮那仏は、法界体性智を成就することを本性としている。以上の四仏の智慧から四波羅蜜菩薩を出生する。四菩薩は金剛・宝・法・業の妃菩薩で、過去・現在・未来、三世のあらゆる聖者・賢者らを生み育てる母である。ここにおいて、究極の境地であるサトリそのものの法界体性（大日如来）の智慧から四仏が出生し、四仏に各々四菩薩が近侍するのである。

東方の阿閼仏には、金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜（善哉）が近侍し、

南方の宝生仏には、金剛寶・金剛光・金剛幢・金剛笑が近侍し、

西方の阿弥陀仏には、金剛法・金剛利・金剛因・金剛語が近侍し、

北方の不空成就仏には、金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳が近侍する。

四仏の各々の四菩薩を十六大菩薩とする。

三十七尊のなかにおいて、五仏と四波羅蜜菩薩と後の四攝菩薩と八供養菩薩を除き、ただ四仏に近侍する十六大菩薩だけを取ったのである。また、『大般若経』に、「内空」から「無性自性空」に至る「十六空」が説かれている。あらゆる生ある者は、心の本質において、わずかも無垢清浄の本性がある。自利・利他の行が共に備わっている。その本体は、極めて微細であるが明るくはつきりとしている。そして、地獄・餓鬼などの「六道」に輪廻しても、それは変らず、月の十六分の一のようである。およそ、月のその十六分の一の明るさが、もし太陽と月が重なった時には、太陽の輝く光によって月の明るさは奪われ、見えなくなる。しかし、後に起るように、月のはじめから日々明るさが増し、十五日になって月が満ち、円くて妨げるものがなくなる。だから、自心を観じる修行をする者は、はじめに「阿字」を本有の菩提心のなかにはつきりと想い

起し、次第に清らかで明瞭なものにして、無自性・空の智慧を成就するのである。

【原文】

夫阿字者。一切法本不生義。准毘盧遮那經疏釋阿字。俱有五義。一者阿字短聲是菩提心。二阿字引聲是菩提行。三暗字長聲是證菩提義四惡字短聲是般涅槃義。五惡字引聲是具足方便智義。又將阿字。配解法華經中開示悟入四字也。開佛知見。雙開菩提涅槃如初阿字。是菩提心義也。示字者。示佛知見。如第二阿字。是菩提行義也。悟字者。悟佛知見。如第三暗字。是證菩提義也。入字者。入佛知見。如第四惡字。是般涅槃義。總而言之。具足成就。第五惡字。是方便善巧智圓滿義也即讚阿字是菩提心義。頌曰

八葉白蓮二肘門 炳現阿字素光色

禪智俱入金剛縛 召入如來寂靜智

扶會阿字者。指實決定觀之。當觀圓明淨識。若纔見者。則名見真勝義諦。若常見者。則入菩薩初地。若轉漸增長。則廓周法界。量等虛空。卷舒自在。當具一切智。

【書き下し】

夫れ、阿字とは、一切諸法本不生の義なり。毘盧遮那經疏に准ずれば、阿字を釋するに、具に五義有り。一には阿字（短聲）、是れ菩提心なり。二には阿字（引聲）、是れ菩提行なり。三には暗字（短聲）、是れ證菩提の義なり。四には惡字（短聲）、是れ般涅槃の義なり。五には惡字（引聲）、是れ具足方便智の義なり。又、阿字を將つて、法華經の中の開・示・悟・入の四字に配解す。開の字とは、佛知見を開く。即ち雙べて開菩提心を開く。初めの阿字の如し。是れ菩提心の義なり。示の字とは、

佛知見を示す。第二の阿字の如し。是れ菩提行の義なり。悟の字とは、佛知見を悟る。第三の暗字の如し。是れ證菩提の義なり。入の字とは、佛知見に入る。第四の惡字の如し。是れ般涅槃の義なり。總じて之を言わば、具足成就の第五の惡字なり。是れ方便善巧智圓滿の義なり。即ち阿字は是れ菩提心の義なるを讃じて、頌に曰わく

八葉の白蓮の一肘の間に、阿字素光の色を炳現す。

禪と智と俱に金剛縛に入れ、如來の寂靜智を召入す。

扶れ、阿字に會う者は、^{みこ}措な寔れ決定して之を觀ず。當に圓明の淨識を觀ずべし。若し纔に見る者は、則ち眞勝義諦を見る
と名づけ、若し、常に見る者は、則ち菩薩の初地に入り、若し、^{うた}轉た漸く增長すれば、則ち廟、法界に周く、量、虛空に等し。卷舒自在にして、當に一切智を具すべし。

【註記】

①阿字：サンスクリット・アルファベットの最初の「ア」「a」「𑖀」。

②一切諸法本不生：「ア」は「不生」を意味するサンスクリット「アヌットパーダ anuṭpāda」の最初の「a」。一切諸法は緣起生の故に本来自ら生滅しない、不生不滅である、との意。

③毘盧遮那經疏：『大日經疏』（善無畏・一行）の卷十四。

④阿字（短聲）：「ア」「a」「𑖀」。

⑤阿字（引聲）：「アー」「ā」「𑖩」。

- ⑥ 暗字（短聲）…「アム」「am」「𑖦𑖯」。
- ⑦ 惡字（短聲）…「アク」「aḥ」「𑖦𑖱」。
- ⑧ 惡字（引聲）…「アーク」「āḥ」「𑖦𑖱𑖫」。
- ⑨ 法華經の中の開・示・悟・入…『妙法蓮華經』『方便品』に説かれる「開示悟入」の喩え。
- ⑩ 方便善巧智圓滿…大悲方便の智慧を成就していること。
- ⑪ 一肘間…人間の腕の肘から中指の先までの長さの間。
- ⑫ 素光…白い光。
- ⑬ 禪と智…左右の大指（親指）。
- ⑭ 金剛縛…印契の外縛。
- ⑮ 淨識…觀想智・觀想のなかの識知。
- ⑯ 眞勝義諦…すぐれた眞実理。第一義諦。
- ⑰ 菩薩の初地…菩薩の五十二の修行位のうちの最初の段階の「十信」のはじめ「信心」。
- ⑱ 廓…広さ。
- ⑲ 卷舒…伸縮。

【私訳】

そもそも、「阿字」（「ア^a𑖦𑖯」）とは、「不生」を意味するサンスクリット「アヌツトパーダ anuṭpāda」の最初の「a」であり。一切諸法は縁起生の故に本来自ら生滅しない、不生不滅である、という意味である。『大日經疏』によれば、「阿字」の意味に五通りがある。一つは「阿字」（短聲）。すなわち「ア」「𑖦𑖯」であり、菩提心を表わす。二つ目は「阿字（引聲）。すなわち「アー」「𑖦𑖱𑖫」であり、菩提行を表わす。三つ目は「暗字（短聲）。すなわち「アム」「am」「𑖦𑖯」であり、

證菩提を表わす。四爪は「惡字（短聲）。すなわち「阿克」「ア」「ク」であり、般涅槃を表わす。五には「惡字（引聲）。すなわち「アーク」「ア」「ク」であり、具足方便智を表わす。

また、「阿字」の意味を、『法華經』『方便品』が説く「開・示・悟・入」四字に配する解釈がある。「開」の字は、仏知見を開くこと。すなわち菩提心を開くという意味で、最初の「阿字」（「ア」と同じである。これは菩提心を意味する。「示」の字は、仏知見を示すこと。第二の「阿字」（「アー」と同じ。これは菩提行の意味である。「悟」の字は、仏知見を悟ること。第三の「暗字」（「アム」と同じである。これは證菩提を意味する。「入」の字は、仏知見に入ること。第四の「惡字」（「アク」と同じ。これは般涅槃の意味である。総して言えば「阿字」の全部の意味を具えた第五の「惡字」（「アーク」）である。これは大悲方便の智慧を成就しているという意味である。そこで、「阿字」は菩提心の意味であることを讃嘆して、頌に曰わく、

八葉の白蓮華の上、人間の腕の肘から中指の先までの長さの間に、「阿字」の白い光は輝き現れる。
両手を外縛して両大指を縛のなかに入れ、如來の寂靜の智慧を召き入れる。

そもそも、「阿字」に出会う人は、みな決つてこの蓮台の「阿字」を觀想するべきである。まさに円かで明瞭な無垢清淨の識知を觀想するべきである。もしわずかにでも蓮台の「阿字」を見る人は、勝義諦を見る人と言ひ、もし常に蓮台の「阿字」を見る人は、菩薩の初地（「十信」の「信心」）に入り、もし、ますます「阿字」が大きくなれば、その広さは法界に周き、分量は虚空に等しくなる。伸縮自在で、まさに一切智（仏智）を得るであらう。

【原文】

凡修習瑜伽觀行人。當須具修三密行。證悟五相成身義也。所言三密者。一身密者。如結契印召請聖衆是也。二語密者。如密誦眞言文句了了分明。無謬誤也。三意密者。如住瑜伽相應白淨月圓觀菩提心「次明五相成身者。一是通達心。二是菩提心。

三是金剛心。四是金剛身。五是證無上菩提獲金剛堅固身也。然此五相具備方成本尊身也。其圓明則普賢身也。亦是普賢心也。與十方諸佛同之。亦乃三世修行證有前後。及達悟也無去來今。凡人心如合蓮華。佛心如滿月。此觀若成。十方國土。若淨若穢。六道含識。三乘行位。及三世國土成壞。衆生業差別。菩薩因地行相。三世諸佛。悉於中現證本尊身。滿足普賢一切行願故。大毘盧遮那經云。如是眞實心。故佛所宣說。

【書き下し】

凡そ瑜伽觀行を修習する人は、當に須く具に三密行を修し、五相成身ごそうじょうしんの義を證悟すべし。言う所の三密とは、一に身密とは、契印を結び聖衆を召請するが如き、是れなり。二に語密とは、密かに眞言を誦して文句をして、了了分明ならしめ、謬誤無きが如くなり。三に意密とは、瑜伽に住して白淨月の圓滿に相應し、菩提心を觀するが如きなり。

次に、五相成身を明かさば、一には是れ通達心、二には是れ菩提心、三には是れ金剛心、四には是れ金剛身、五には是れ無上菩提を證して金剛堅固の身を獲るなり。然も此の五相は、具に備うれば、方に本尊の身と成るなり。其の圓明は則ち普賢の身なり。亦た是れ普賢心なり。十方の諸佛と之を同じくす。亦た乃ち、三世の修行、證に前後有れども、達悟に及びんぬれば去・來・今無し。凡人の心は合蓮華ごうれんげの如く、佛心は滿月まんがつの如し。此の觀、若し成ずれば、十方の國土の、若しは淨、

若しは穢、六道の含識、三乘の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三世の諸佛、悉く中に於いて現じ、本尊の身を證して、普賢の一切の行願を滿足す。故に、大毘盧遮那經に云わく。「是くのごとくの眞實心は、故佛の宣說する所なり」と。

【註記】

①三密行：行者が、手にある仏尊の印を結び（身密）、口にその仏尊の真言を唱え（口密（語密））、心にその仏尊の姿を想い浮かべ（意密）、行者と仏尊の身密・口密（語密）・意密とが一体同化する観法。

②五相成身：五相成身観。『金剛頂経』に説かれる即身成仏の観法。1 通達菩提心・2 修菩提心・3 成金剛心・4 証金剛身・5 仏身円満。

③契印：行者が両手で結ぶ仏尊を意味する印。印相・手印。

④合蓮華：つぼみの蓮華。

⑤含識：凡夫・衆生、有情。

⑥中に於いて：普賢の菩提心。合蓮華・仏心。その象徴の月輪。

⑦大毘盧遮那經：『大日経』『成就悉地品』。

⑧故仏：過去世に現出した仏。

【私訳】

およそ、止観行によつて観法を修習する人は、みな実際に「三密行」を行じ、「五相成身観」を成就すべきである。今言つた「三密」とは、一には身密であり、両手にある仏尊を意味する印を結び、諸尊聖衆を召請するのがそれである。二には語密であり、口にその仏尊の真言を唱え、その文言を明了にし、誤りなきようにするのである。三には意密であり、観法に集中して無垢清浄の円く満ちた月輪に相応して菩提心を観ずるようなことである。

次に、「五相成身観」を説けば、一に通達菩提心、二に修菩提心、三に成金剛心、四に証金剛身、五に仏身円満、無上菩提を覺つて堅固な仏身を成就すること。つまり、この「五相」を具備すれば、本尊大日如来の仏身を得るのである。その欠けることなき明るさは堅固な菩提心を持つ金剛薩埵の身と心であり、十方の諸仏と同じである。すなわち、過去・現在・未来の

三世における修行は、サトリに至るのに前後があるが、サトリのあとには過去・現在・未来はない。凡夫・衆生の心はまだつぼみの状態の蓮華のようであり、仏心は円く満ちた満月のようである。この観想を成就すれば、十方の国土の清らかとか汚れているかは別として、六道の凡夫・衆生、声聞・縁覚・菩薩の修行位、及び三世の国土の造成と破壊、衆生の宿業の別、菩薩の修行位の在り様、三世の諸仏は、悉くこの普賢の菩提心（月輪）のなかに現出し、本尊大日如来の仏身を成就して、普賢菩薩のあらゆる慈悲心（行願）を満たすのである。故に、『大日経』『成就悉地品』に説いている。「このような真実の心は、過去世の仏がすでに説いている」と。

【原文】

問前言三乘之人。有法執故。不得成佛。今復令修菩提心三摩地者。云何差別。答三乘之人。有法執故。久久證理。沈空滯寂。限以劫數。然發大心。又乘散善門中。經無數劫。是故足可厭離。不可依止。今眞言行人。既破人法二執。雖能正見眞實之智。或爲無始間隔。未能證於如來一切智智。欲求妙道。修持次第。從凡入佛位者。即此三摩地者。能達諸佛自性。悟諸佛法身。證法界體性智。成大毘盧遮那佛。自性身。受用身。變化身。等流身。爲行人。未證故。理宜修之。故大毘盧遮那經云。悉地從心生。如金剛頂瑜伽經說。一切義成就菩薩。初坐金剛座。取證無上道。遂蒙諸佛授此心地。然能證果。凡今之人。若心決定。如教修行。不起于座。三摩地現前。應是成就本尊之身。故大毘盧遮那經云供養次第法云。若無勢力廣增益。住法但觀菩提心。佛說此中具萬行。漸足清白純淨法也。此菩提心。能包藏一切諸佛功德法故。若修證出現。則爲一切導師。若歸本則是密嚴國土不起于座能成一切事。

【書き下し】

問う、「前に、三乗の人は、法執有るが故に、成佛を得ずと言う。今復た、菩提心を修せしめる三摩地とは、云何が差別なる

や」と。答う、「二乗の人は、法執有るが故に、久々に理を證し、空に沈み寂に滯つて、限るに劫數を以つてし、然して大心を發す。又、散善門の中に乘じて、無數劫むしゅこつを經ふ。是の故に、厭離すべきに足り、依止すべからず。今、眞言行人、既に人法の上執を破して、能く正しく眞實を見る智なりと雖も、或いは無始の間隔けんきやくの爲に、未だ如來の一切智智を證すること能わず。故に、妙道を欲求し次第を修持して、凡從り佛位に入る者なり。即ち、此の三摩地とは、能く諸佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證し、大毘盧遮那佛の自性身・受用身・變化身・等流身を成ず。爲いわく、行人、未だ證せざるの故に、理、宜しく之を修すべし」と。故に大毘盧遮那經に云わく。「悉地は心從り生ず」と。金剛頂瑜伽經に説くが如し。「一切義成就菩薩、初めて金剛座に坐し、無上道を取證して、遂に諸佛の此の心地を授くることを蒙つて、然して能く果を證す」と。凡そ、今の人、若し心決定して、教の如く修行すれば、座を起たずして三摩地の現前し、是に本尊の身を成就すべし。故に大毘盧遮那經の供養次第法に云わく。「若し、勢力の廣く増益すること無ければ、法に住して但し菩提心を觀ずべし。佛、此の中に萬行を具して、淨白純淨の法を満足すと説く」と。此の菩提心は、能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば、則ち一切の導師と爲る。若し本に歸すれば、則ち是れ密嚴國土なり。座を起たずして能く一切事を成す。

【註記】

- ①散善門…顯教。淨土系では、散漫な日常心のまま善を修めること。その反対が定善。
- ②一切智智…一切諸法の眞實を知る智慧・仏智。

③一切義成就菩薩…『金剛頂經』に説かれる、密教での釈迦（シッダールタ）。

④三摩地…ここは、三密平等の境地。

⑤本尊の身…本尊と等同一体の仏身。

⑥勢力…凡夫・衆生を増益する力。

⑦密嚴國土…凡夫・衆生の現実世界が即仏國土であるという意。娑婆即淨土。「密嚴淨土とは、大日心王の蓮都、遍照法帝の金刹、秘密莊嚴の住処、曼荼淨妙の境界なり」（覺鑒『密嚴淨土略観』）。

【私訳】

問う人が言うに、「以前、声聞・縁覺の二乗の人は、認識対象である事物・事象の属性を實在として執著する（法執）ので成仏ができないと言ったが、今言った「五相成身観」など、菩提心を修習する観法も法執ではないのか、どちらがうのか」と。答えて言うに、「二乗の人は、法執があるから、途方もなく長い時間をかけて認識主体（人我）の道理（「五蘊皆空」）を覺り、人空の理に浸り寂靜の境地にとどまり、永遠に近い限らない時間を要したあとで、（人法二空の）大乘の心を發起するのである。また、日常心のまま善を修める顕教（散善門）において、無限の時間を費やすのである。だから、二乗とは離れるべきであり、それに依存すべきではない。今、真言行者は、すでに人法二執のさらに上の執著（「無明」）を断つて、よく正しく（人法二空の）真実を観じる智慧を会得しているが、それでも、はじめもわからない昔からの時間的隔たりのために（ほとんどわからないわずかな執著が残っていて、まだ如來の仏智を覺ることができない。だから、すぐれたサトリの道を求め、順次（「五相成身観」などの）観法を修し続けて、凡夫・衆生の心位から仏の境地へと入ることができる。すなわち、この観法は、よく諸仏の本性に心が届き、諸仏の真実体（法身）を覺り、法界の真実の本性を明らかにする智慧を会得し、大日如來の自性身・受用身・變化身・等流身を成就する。思うに、真言行者でまだサトリに至らない場合は、以上の道理をよく心得て修行をするべきである」と。

時に、『大日経』「悉地出現品」に説くに、「サトリは自心から生じるものである」と。また、『金剛頂経』に説くに、「一切義成就菩薩が、はじめて金剛座に坐り、この上なきサトリの境地を得て、ついに諸仏によつてこの（三密平等の）境地を授けられ、そして仏果を得たのである」と。

おおよそ、今の真言行者も、もし意志堅固にして、如法に観法を行じれば、長い時間をかけなくても三密平等の境地（三摩地）の現実化し、本尊と等身の仏身になることができる。故に、『大日経』の「供養次第法」が説くに、「もしも、凡夫・衆生をますます広く利益する力がないなら、観法（月輪観）「阿字観」に専念して菩提心の観想を行じることである。仏は、この観想行のなかにすべての仏行が含まれていて、無垢清浄の真実が満ちていると説いている」と。この菩提心は、よく一切の諸仏の自利利他の功德の教法を包含しているから、もしこれを修習し覺つて現実のものとなれば、すべての修行者の導師となる。もし、本源に起ち歸つて言えば、この世界が「密嚴国土」である。長い時間をかけなくても、よく一切の仏事仏行を成就するのである」と。

【原文】

讚菩提心曰

若人求佛慧 通達菩提心

父母所生身 速證大覺位

【書き下し】

菩提心を讚じて曰わく、

若し人、佛慧ぶつてを求めて、菩提心に通達すれば、

父母所生に身に、速に大覺の位を證す。

【私訳】

菩提心を讀えて言うに、

もし人あつて、仏の智慧を求めて、本有菩提心の本性を觀想すれば、

父母から生れたこの現身に、すみやかに仏智を覺つた境地を得ることができる。

■あとがき

この『菩提心論』の作者が、真言付法の第三祖龍猛菩薩であれ、インド大乘中觀派の祖師龍樹であれ、ほかの誰であれ、その原文に直接あたってみると、正統密教の立場から論じられた並々ならぬ「菩提心」論で、「自性清淨心」「仏種」「仏性」「本来成仏」「本覺」「如來藏」「菩提心」を説く大乘の経論に引けを取らず、宗祖大師が重用したのもむべなるかなと思えてくる。事実、宗祖大師は、『即身成仏義』の「二経一論八箇の証文」に『菩提心論』を引用し、『秘藏宝鑰』の第十秘密莊嚴心に「三摩地段」全文を引用し、『十住心論』の各住心に「勝義段」「三摩地段」の一部を引用し、『二教論』における引証の第十にも引用して、この『菩提心論』を論拠としている。

また、本論中、とくに「三摩地段」では、「二乗の人」などの修行者と真言行者のちがいが説かれている。宗祖大師の言う顕教と密教の峻別がすでにこの『菩提心論』に見えている。宗祖大師の顕密二教の峻別の論拠は、『弁顕密二教論』で明らかのように、教義としては「法身說法」「果分可説」、経論としては主として『釈摩訶衍論』なのであるが、この『菩提心論』もすでに顕教と密教を峻別している。

この『菩提心論』は、真言行者にとつての三種「菩提心」を説く。「行願」（慈悲利他）と「勝義」（無自性・空の教義）と「三摩地」（自心の本有「菩提心」の觀想）であり、三種一体である。もともと「菩提心」の概念定義は「サトリを志求する堅固な心（意志）」であるが、周知の通り、密教では「大日経では、菩提と心とが同義で、共に空と見る。即ち菩提心は悟りそのものを意味する。大日経疏・菩提心論・三昧耶戒序・菩提心義（天台）等の釈による。大日経疏では白淨信心、戒序では信心という。全て菩提心の体のことで、この体から二つの働き（上求菩提・下化衆生）が起る。・・・密教的の發菩提心は六大一実の体性を悟り、凡即是仏の觀念に住して、上求菩提・下化衆生の二利の心を發することといえる」（『密教辞典』）。

この三種「菩提心」の具現者であり実践者が密教の菩薩を代表する金剛薩埵である。難解な『理趣経』の「十七清浄句」の「妙適清浄句 是菩薩位」も「欲箭清浄句 是菩薩位」も「愛縛清浄句 是菩薩位」も、「行願」「勝義」「三摩地」一体の堅固な「菩提心」を有する金剛薩埵の心位なるが故であり、すなわち「菩提心」は仏教思想史の最終ステージで人格を得て、金剛薩埵という絶妙の菩薩になったのである。

この『菩提心論』（一巻）ならびに、宗祖大師の『弁頭密二教論』（二巻）・『即身成仏義』（一巻）・『声字実相義』（一巻）・『吽字義』（一巻）・『秘藏宝鑰』（三巻）・『般若心経秘鍵』（一巻）と合せて七本十巻、真言宗の伝統教学で言う「十巻章」の解説成満となった。令和五年（二〇二三）の弘法大師ご誕生千二百五十年を機縁に発願したものであったが、無魔、所期の目的を達成することができた。各本のそれぞれに、江戸時代の学匠が残された註釈をはじめ、近年の先師・先学の手になる研究書や出版物にたびたび助けられた。その学恩に対し深く頭を垂れ感謝の念を表する次第である。

令和七年 水無月

草学道人

長澤弘隆